

『私と顎顔面補綴との関わり』

九州歯科大学口腔機能学講座顎口腔欠損再構築学分野

鱒見 進一

Division of Occlusion & Maxillofacial Reconstruction
 Department of Oral Function, Kyushu Dental University
 Shin-ichi MASUMI



私は、1986年に初めての顎補綴患者を配当され、どう治療を進めて良いのか悩んでいるときに、「顎顔面補綴学会雑誌」に出会い、ただちに学会に入会した。自分なりに治療した症例について学会で発表して意見を聞きたいと思い、第3回学術大会において、「開口障害を伴う上顎顎補綴患者に対する維持法について」という演題で発表した。発表後の質疑応答でこの学会の洗礼を浴び、自分の勉強不足を痛感した事を記憶している。

当時の悩みは、顔面欠損については当科では対応が不可能であったこと、上顎欠損では、耳鼻咽喉科からの紹介患者の多くが皮弁で口蓋を封鎖しており、呼吸により顎堤形態が変化するのみならず、欠損腔のアンダーカットを維持に利用できないこと、また、半側切除例の健側中切歯の近心側歯槽骨が欠損している場合が多く、維持歯としての利用もできず結果的に脱落してしまうこと、下顎欠損では、欠損部を舌組織で被覆し頬粘膜と縫合している場合、舌組織が常時可動しているため正確な印象が困難であり、舌側辺縁部が明確でないため適切な義歯製作が不可能であり、装着しても不安定のみならず咬合時に疼痛を誘発することとなり、腫瘍除去は成功しても歯科医師にとって肝心の咀嚼機能の回復を断念せざるを得ないことなどであった。このような結果は、耳鼻咽喉科、口腔外科、歯科補綴における臨床手技の不備もさることながら、耳鼻咽喉科や口腔外科主導で手術が行われており、補綴担当医との術前カンファレンスなども皆無であったことが最大の問題点であると思われた。患者を悲惨な状況から救出するために、日本顎顔面補綴学会において、口腔外科医と補綴歯科医が様々な問題点を抽出し、その打開策の検討を積み重ねてきたことが今日の顎顔面補綴の進歩に繋がっていると感じている。

今回、私が顎顔面補綴に関わった35年間における様々な出来事について、感謝の意を込めて講演したいと考えている。

【略 歴】

- 1985年 九州歯科大学大学院歯学研究科 修了
- 1992年 文部省在外研究員:UCLA Dental Research Institute
- 2003年 九州歯科大学教授
- 2008年 九州歯科大学附属病院病院長
- 2010年 九州歯科大学大学院研究科長
- 2012年 九州歯科大学 副学長
- 2013年 九州歯科大学附属図書館長
- 2013年 日本磁気歯科学会理事長
- 2014年 日本顎顔面補綴学会理事長
- 2020年 日本顎関節学会理事長